

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	小島 弘行	指導教員 (主査)	小林 幸治

論文題目	介護老人保健施設でボランティア活動に参加する後期高齢者が 生活の価値を高め方略性をもって活動を継続するプロセス ー活動動機と活動継続・終了に影響する要因に着目してー
------	--

本文概要

【序論】高齢者のボランティア活動は、若い成人と比べ活動頻度が多く、生活満足度が向上し、健康に寄与する活動 (Van, 2000) である。筆者は、介護老人保健施設 (以下、老健) でボランティア活動を行う地域高齢者と関わる中で、高齢者がその活動を行う意味づけの大きさを実感した。そして、国内の高齢者が行うボランティア活動に関する文献レビューを行った結果から、高齢者のボランティア活動と健康に関する研究において、活動継続に関連する要因等の検討、質的研究や特に後期高齢者を対象とした研究の必要性が示唆された。そこで、今回老健で入所者向けのレクリエーションや職員補助を行う施設ボランティアの後期高齢者に焦点を当てて、活動継続プロセスに関する質的調査研究を行った。

【目的】本研究の目的は、介護老人保健施設でボランティア活動を行う後期高齢者の活動継続プロセスを明らかにする。そして、活動の継続を支える支援方法への示唆を得ることである。

【方法】2020年3月時点で、月1回以上かつ1年以上施設ボランティア活動に従事する後期高齢者10名 (男性5名、女性5名、平均年齢81.8±3.4歳、活動期間平均13±9.4年、活動頻度月1回から週2回以上) に、半構造化面接法で活動による生活への影響、活動継続と継続困難さなどに関するインタビューを行った。分析は実際の支援に活用可能な成果を得るため実践的質的研究法である木下 (2020) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた。そして、生成した概念、サブカテゴリー、カテゴリーの関連性を文章化したストーリーラインを示し、結果図を作成した。また、分析の際は、データの信頼性や分析の妥当性を検討した。本研究は、目白大学医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】39個の概念、14個のサブカテゴリー、4個のカテゴリーが生成された。これらにより、介護老人保健施設でボランティア活動に参加する後期高齢者が活動を継続するプロセスは、次のように示される。様々な喪失感を経験する高齢者が施設ボランティア活動に参加することによって、高齢者の中に【ボランティア役割により高まる自尊感情】と【再社会化により高まる生活の価値】が生起し、活動が重要なものへ変化する。そして、【経時的変化に対する活動継続の方略】を用いて活動を継続するが、この活動は【長期的活動が可能になる環境】に支えられている。

【考察】高齢者ボランティアは、活動を有意義なものとして認識し、生活における重要な活動と位置づけていた。また、活動継続が困難になった場合は活動継続の方略を探り対応していた。高齢者ボランティアはボランティアという役割を通して、自身の活動意義を確かめ、仲間とのつながりを保つために可能な限り活動を続けようとしていた。活動継続には、活動動機付け、活動目標の調整、高年齢者向け活動種目の設置、メンバー同士の繋がり強化、「健やかな活動終了」へ支援の必要性が示唆された。

【結論】様々な方略により展開される活動継続プロセスが機能し、高齢者ボランティアの生活の価値を高めていた。今後は、生成された概念から質問紙を作成し施設ボランティア活動の継続要因を分析することが課題である。

【文献】Van Willigen M (2000) : Differential benefits of volunteering across the life course, The journals of gerontology. Series B, Psychological sciences and social sciences; Vol. 55 (5) , S308-18.

木下康仁 (2020) : 定本 M-GTA, 医学書院, 東京.